

戦争と國文學

(一)

鈴 木 重 雅

こゝで、戦争といふのは、極めて廣い意味でいふのであつて、個人間の争鬪、乃至は格闘をも、含めて居るのである。さういふ意味での戦争は、人類の出現と同時にあつた筈であるから、戦争が國文學に於て、如何に現はれてゐるかといふことを見るには、記紀の二典の検討より始めなければならない。

古事記によると、伊邪那岐命が、迦具土神の頸を斬り給ふところが、争鬪の記事の最初であり、次で、黄泉軍の段以下、いろ／＼の所見がある。が、散文の部分についていへば、戦争なり、争鬪なりの原因とか、経過とかは示されてゐて、即ち、その事件は敘述せられてゐるけれども、いはゆる場面の描寫が、絶無といふではないが粗笨であり、不充份であり、戦争當事者の動作、表情、服装などが詳かでない、戦鬪の開始、展開、時々刻々の

變化、及びその終局などについての描寫が、不充份である。事件の荒筋だけでは、史傳文學として見ることは出來かねる。いふまでもなく、史傳文學の内容たる歴史は事件の有機的連續であり、累積であるが、その事件の一横断面は、場面である。いはゞ、場面の連續、累積が事件となるのである。場面が活寫されて、始めて、事件の描寫が生動して來る。場面は、獨り、戦争文學のみならずあらゆる物語文學に、缺くべからざる要素である。例へば、源氏物語における須磨の卷なり、明石の卷なりは、その一例である。古事記中卷の神武天皇御東征の記事の中の、長髓彦征伐の條に、

故其の國より上り出でます時に、浪速の渡を経て、青雲の白肩の津に泊たまひき。此の時登美能那賀須泥毘古軍を興して、待ち向へて戦ひしかば、御船

に入れたる楯を取りて下り立ちたまひき。故其地の號を楯津とつけつるを、今は楯津とないふ。

これは、軍團相互の戦ひであるが、「待ち向へて戦ひし」といふのみで、如何に戦つたかといふ具體的記述が無い。事件の荒筋を語るといふ丈のものにすぎないのである。それで、例へば、源氏物語の構想の梗概を記述して見たところで、それは、文學といへないので、源氏物語は、矢張り、その場面を具へた事件の描寫をもつてゐるから、一つの物語文學といへる如くに、古事記も、これらの條件を具足せねば、戰爭を、完全に描寫してゐるとはいはれない。それでも、稍、具體的に記された部分もあつて、例へば日本武尊の熊襲征伐に關しては、

故熊會建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重を圍み、室を作りてぞ居りける。こゝに新室うたげせむといひとよみて、食物を設け備へたりき。故其の傍をあるきて、其の樂する日をまちたまひき。爾にその樂の日になりて、そのゆはせる御髪を童女の髮の如梳り垂れ、その姨の御衣御裳を服して、既に童女の姿

になりて、女人どもの中に交り立ちて、其の室内に入り坐しき。爾に熊會建兄弟二人その嬢を見感で、己が中に坐せて盛に樂げたり。故その酣なる時に臨りて、懷より劍を出し、熊會が衣の衿を取りて、劍もてその胸よりさし通したまふ時に、其の弟建見畏みてにげいでき。乃ちその室の椅の本に追ひ至りて、その脊をとらへて劍もてしりより刺し通したまひき。こゝにその熊會建まをしつらく、「其のみたちをなうごかしたまひそ。われ白すべきことあり」と申す。

とあつて、こゝでは、かなり、具體的に記述してあり新室樂の狀況、變装の様子、格闘の狀況などが描かれてゐるが、猶、一種の説話風の記述で、時々刻々の狀況の變化、坐作進退の變化などが、活動的に描かれてゐないといふ憾みがある。但、古事記の内、その最も成功せる部分は、天照大神が、男裝せられて、かの山川天地を撼動せしめつゝ、参り上り給ふ素盞鳴命を待ち給ふ條にある。これは、いはゞ唯一の例といつてよからう。

時代が、やゝ下つて、萬葉集になると、如何かといふ

に、萬葉集は、古くは 仁徳天皇時代より近くは奈良朝末まで、約五百年間の歌の總集であり、その間に、幾多の戦争があつた譯であるが、不思議にも、あまりあらはれてゐない。たゞ、高市皇子城上殲宮之時、柿本朝臣人麻呂、作歌一首并短歌の中に、天武天皇が、和射見が原の行宮に於て、東國の兵を召され、高市皇子に、軍の指揮を一任し給うた時、皇子が三軍を統率し給へる情況を描いて、

大御身に 太刀取佩かし 大御手に 弓取持たし

御軍を あともひ給ひ 整ふる 鼓の音は

雷の 聲と聞くまで 吹なせる 小角の音は

あた見たる 虎が吼ゆると 諸人の おびゆる迄に

さゝげたる 旗のなびきは 冬ごもり 春さりくれば

野毎に つきてゑ火の 風のむた 靡くが如く

取持たる 弾のさわぎ み雪降る 冬の林に

つむじかも い卷き渡ると 思ふ迄 聞きのかしこく

引放つ 矢の繁げく 大雪の 亂れて來れ

まつるはず 立向ひしも つゆじもの消なば消ぬべ

ゆく鳥の 争ふはしに 渡會の 齋ひの宮ゆ
神風に いふき惑はし 天雲を 日の目も見ま
とこやみに 覆ひ給ひて

といつてある。「整ふる鼓の音」以下は、鼓が四句、角が六句、幡八句、弓八句、矢四句が続いて、これらの武器の活動によつて、戦場の光景を描いてゐる。日本書紀には、

旗幟蔽野、埃塵連天、鉦鼓之聲聞于數千里、列弩亂發、矢下如雨。

とある。この旗幟の風にひるがへる様を、野火にたとへてあるのは、古事記の序文に、當時の戦況を叙して、

皇興忽駕凌渡山川、六師雷震、三軍電逝。杖矛舉威、猛土煙起、絳旗耀兵、凶徒瓦解。

とあつて、天武天皇方は、白旗の近江朝廷方に對して、赤い旗を立てゝゐたものなることは確かであるが、赤旗なればこそ、之を火にたとへたのは、いかにも、妥貼な形容である。弾の騒ぎを、疾風枯葉を捲くに譬へたのも面白く、矢の群り飛ぶを白雪の霏てたるに比べたるも、

生彩がある。上代における戦闘描寫としては、この右に出づるものは無いと考へられるのである。しかも、最後に、皇謨を翼賛する神の攝意か、伊勢の神風が吹いたといふ記述は、更に劇的効果を發揮して、雄渾豪壯、戰爭の活動性を描き出して、頗る力がある。

かくて、奈良朝末期に至るまでに、小戦は幾度かあつたのではあるが、萬葉集に見えてゐるやうに、この時代は、打續く太平の爲に、風紀亂れ、軍律も嚴しからず、宮城警衛の武官達が、擅に、その警備區域を去つて、春日に漫歩し、處罰を受けたり。武を以て仕ふる大伴家の總帥家持が、一族に對して、自肅を諭す歌(萬葉集)を作らざるを得なかつた位に、綱紀が弛廢してゐた故もあらうが、とにかく、戰に關する作品は、殆んど無いといつて宜い。

古事記は、その序文に見ゆる如く、帝紀や本辭などの如き古記録を「仔細措撫」して成れるものであり、それらの記録は、漢字の音訓の稚拙な利用によつて、辛うじて、記録したものであると思はれるから、戦況の變化な

どを活寫することは到底出来ないものと思はれる。但、軍兵の志氣を鼓舞する爲の所謂軍歌、軍陣の間に於て、自らにして成れる歌などは、簡短ながら、却つて、這般の消息を傳へてゐる。

敵愾心を歌つたものに、

みつみつし 久米の子等が

垣下に 植ゑし藎

口疼く 我は忘れじ

うちてしやまむ (記)

作戦を仄かしたものに、

神風の いせの海の

大石に はひもとろふ

したゞみの い這ひ廻り

うちてしやまむ (記)

戦機の熟せるを見て、指令せるものに、

忍坂の 大室屋に

人多に 來入り居り

人多に 入り居りとも

瑞々し 久米の子が

頭槌い 石槌もち

うちてしやまむ

瑞々し 久米の子等が

頭槌い 石槌もち

今撃たばよらし (記)

戦勝を賀したるものに、

今はよ 今はよ

あゝ しやを

今だにも 我子よ

今だにも 我子よ (紀)

疲弊困憊、兵糧の缺乏を訴へたものに、

楯並めて 伊那佐の山の

木の間よも い行き候ひ

戦へば 我はや飢ぬ

島つ鳥 鶉飼が伴

今助けに来ぬ (記)

而して、精誠の氣、忠貞の節、炳として、日星の如き

は、神武天皇に仕へたる大伴、佐伯の宿禰の歌へる

海行かば 水漬く屍

山行かば 草むす屍

大君の へにこそ死なぬ

和には死なし (續日本紀)

である。

更に、平安朝時代に入ると、蝦夷征伐、刀伴の入寇、承平天慶の亂、前九年の役、後三年の役などがあつたが僻遠の地に起つたことである爲、記録體の文献はあるにしても文筆に疎い武士や地方人が、文學的作品として、之を筆にするに及ばずして終つた。而して、平安末期に至つて、源平二氏の對立は、皇室内部の動搖を機として激發せられ、抗争となり、戦争となつて、近畿の風雲、急を告げて、輦轂の下、干戈の巻となり、都人は、現前に、之を目撃することゝなつたのである。かくて、そのまざ／＼しき印象を録した戦記物が表はれることゝなつて、戦争そのものを對象とする文學が成立した。従つて聞書きといつたやうな模糊たるものでなく、すべてが、

鮮麗な影像となつて、紙表に躍るが如く感ぜられる。武士を描くに、その容貌、軍装を述べて、その武勇を彷彿たらしめ、——例へば、「爲朝は七尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て、獅子丸を縫ひたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同獅子金物打ちたるを着るまゝに三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて銃打ちたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎黨に持たせて歩み出でたる體、機噲もかくやと覺えてゆゝしかりき」。(保元物語)とある。

武士が、公卿の侍衛、所謂さむらひとして、盲目的に公卿の走狗となつてゐたものが、この武力第一の時代に遭遇して、その力量を自覺し、從來武士をして垂涎せしめた除目を嗤笑し、裸一貫で以て、天下の檜舞臺に潤歩するの意氣を示せるを敍して、『見えたる事もなきにかねてなりて何かせむ。只義平は本國にて兵共と呼びつけられて候へば、元の悪源太にて候はむ。』(平治物語)と述べたるは、當時の武人の眞骨頭を示して餘りがある。當

時の武士の精神的方面は、これで充分分るが、更に、戰鬪の實況を活寫した點について見ると、例へば金子十郎と高間四郎との勝負に於て、「……押變びて組みて落つ。

高間は兄弟共に聞ゆる大力なるを、家忠上になりて、押へて首をかゝむとする處に、高間三郎落ち重りて弟を討たせじと、金子が兜を引き仰げ、首をかゝむとしけるを下なる敵の右左の手を膝にてしきつめ、上なる敵の弓手の草摺引き揚げ寄せ返して、和も通れくと三刀刺して、ひるむ所に下なる敵の首を取り、太刀のさきに差揚げて、この頃鬼神と聞え給ふ筑紫御曹司の御前にて高間四郎兄弟をば、家忠討ち取つたりとぞ呼ばりける」(保元物語)の條など、息もつかさぬ描寫であつて、殊に、筒井淨妙と一來法師の勝負(平家物語)の如きは、軍記中、最も精采を發揮せる佳章である。

次に、軍略、作戰、用兵、布陣等の記述に關しては、より多く、太平記に於て至る所に見らるゝことでもあり且つ、長くなるから、煩を厭うて、省略に従ふ。要するに、古事記や將門記風の記述から、戰記に目を移すと、

恰も、春秋を去つて史記に就くが如き感があるのである。

次に興禪護國といつた様な思想的方面について見るに護國といふ思想の第一歩は、國といふ自覺に發する譯であるが、平安朝時代には、平安の天地に踞踏してゐる爲に、遣唐使の派遣とか刀伊の久寇とかいふやうな對外的事件もあるにはあつたが、概して、國といふ自覺に乏しく、個人的主我的傾向が強かつた。然るに、戦記物語の出でたる鎌倉時代に入つてからは、やゝ後になつてからではあるが、蒙古の襲來等の事件があり、國民が政治的に國家的に目醒め來り、「日本は是神國なり」(保元)。

「日本神國なり、神は非禮を受給はず。」(平家)「日本秋津洲は本是神國也」(盛衰記)といふやうに、軍記類に現はれてゐる。この根本觀念に本づいて、第一に尊皇の大義が説かれ、皇室に對する忠義は、移して以て、武家の主従の間の第一の徳目とせられ、第二に、神佛祖先の崇拜、第三に、勇武、名譽の尊重が力説せられてゐる。第四に、無常觀、因果思想の浸潤せることは、驚くべきものがある。

右の中、第一の忠義については、戦記の筆者の最も重視してゐるところであり、忠義の大道に疚くもの、人臣の道を誤るものあれば、神罰佛罰、忽に至るとなし、忠孝一致せざる時に於ては、大義滅親の道を執るべきものと説いてゐる。かくて、弓矢取る身を悲む物語は、至るところに見られる。

保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記等には、まだ、禪宗についての記事や思想は、あまりあらはれてゐないが、太平記になると、年代的に見て、當然であるが、大分に所見が増して來てゐる。併し、それには、特に、禪を興して國を護るといふが如き思想は表はれてゐない。一般的に、佛法と王法とは、共に興り、並び存して行くべきであるといふに止まつてゐるのである。

要之、戦記物語は、戦争を對象として描き出された文學であり、文學史上に於て、鎌倉時代に始めて出現したものである。優勝劣敗は、自然界の鐵則であるが、人類の世界に於て、急激に發顯すれば、所謂戰鬥戦争となる。人の生命を賭するといふ點に於て、最も深刻味があるの

であつて、勝敗いづれにせよ、之を中心として起る悲喜の佳章に始まる悲愁の調は、全篇に横溢し、人をして三哀歡の情は、因果無常の理法と共に、痛く時人を動かし、省せしめ、烈士貞婦の物語は、萬古人心を廓清するもの殊に、二十年の間における平家の興亡は、因果無常の教がある。現下の時局に於て、國民必讀の文學であるとい戒が、無稽に非ざるを、現前に、周知せしむるに至つても、ふも溢美の言ではないと思ふ。

「平家物語」なる一大劇詩が生れたのであり、冒頭

忠を盡くすといふは、先づ我が心を正しくし身を治め、毛頭君に二心なく、人を恨み咎めず、日々に仕怠らず、一家に於ては父母に能く孝を盡くし、(中畧)御國の政を正敷、不善人をば遠ざくる様にするときは善人は日々に進み、不善人はおのづから主人の善を好む所に化せられ、惡を去り善に遷るなり。如此君臣上下善人にして、欲薄く奢を止むる時は、國に寶滿ちて民も豊かに治り、子の親をしたしみ手足の上を救ふが如くならば、國は自ら平に成るべし、是れ忠の初なり。(中畧)則ち先きに云ふ所の千手觀音の一心正しければ千の手皆用に立つが如く、貴殿の兵術の心正しければ、一心の働自在にして數千人の敵をも一劍に隨ゆるが如し、是れ大忠にあらずや。

(不動智神妙錄)